

「ポップ・チャイナ」の特集にあたって

編集部

「ポップ・チャイナ」特集号の編集のきっかけは、四年前に遡る。

二〇〇一年秋、大学より一年間の在外研修の機会を得た私は、研修先としてアメリカ・ニューヨークにあるコロンビア大学を選んだ。ニューヨークはパリに劣らぬ芸術の都であり、私はメトロポリタン美術館、近代美術館、カーネギー・ホール、リンカーン・センターなどに入り浸り、帰るのも忘れるほどだった。それらは私に多くの知的刺激をもたらしてくれた。もちろん、一年間に受けた知的刺激はこればかりではない。アメリカの大学の教学と学術研究——特に中国文学の教学と研究とに、大きな刺激を受けた。

アメリカでは、中国文学研究は地域研究の一分野とされている。そのため、中国・日本・韓国の言語・文学・文化に関する教学は、言語文化学科や東アジア学科で行われるほか、通常は他の周辺分野とも連携して行われている。例えば、比較文化学科・映画学科・演劇学科・社会科学系地

域研究などと連携しており、教員も両方の兼任である場合が多い。アメリカの大学における中国文学研究の特色は、言語や文字の研究、つまり漢学(hanology)の段階をすでに脱して、周辺の諸分野と広範に関連しあう超領域・複合領域の性質を帯びていることにある。同時に、「文学」や「作品」(work)が意味する範疇を拡大し、小説や詩、散文などの伝統的なジャンルについても、視覚テキストや視覚文化まで含めて考えようとするものであった。「文学」の範囲を最大限に拡大しようとするのである。そこでは、映画・アニメ・ドラマ・流行歌・漫画・コミック・チャールなどのいわゆる「流行文化」「大衆文化」でさえも、中国文学の教学と研究の対象になる。

本特集の企画は、こうした一年間のアメリカでの研修の成果である。私は何も「隣の芝生は青い」などというつもりはない。私の編集の意図は、文学研究に新しい素材を提供し、中国研究にも多面的な切り口があることを紹介することにある。

まず雷啓立氏「革命から消費革命へ」は、中国の最新のポップ・カルチャーの現状を理解するのに役立つだろう。鼎談は、いわゆる「兩岸三地」（あるいは「兩岸兩地」とも）から研究者をむかえ、「グローバルな消費文化と中国人の価値観の変化」について議論したもので、三人の研究者の討論内容は広範かつ深遠である。特に、中国・台湾・香港の文化研究の現状に関して提示された、ポップ・カルチャーの「ローカル化」「グローバル化」という論点は、きわだっている。また香港ポップ・カルチャーの特殊性については、本特集の池上貞子氏の「香港ザ・ポップ」を併せてお読みいただきたい。

本特集が収載する個々の論文、ポップソング・映画・アニメ・服飾文化・アートに関する研究は、読者の興味を喚起するに違いない。先にも述べたように私は「隣の芝生は青い」などというつもりは毛頭ない。しかし、中国には「他山の石、以て玉を攻（おさ）むべし」という言葉がある。フエイ・阮・クリーマン氏の論説は、アメリカのチャイナ・ポップ研究の最先端を紹介したもので、我々に最新の知的刺激をもたらしてくれるものである。このほか、長年、中国の現代アートを研究してこられた牧陽一氏の論文は、中国美術界の現状を指摘したものとして、非常に意味深い。台湾の著名なジェンダー問題研究者であり、文化問題の研究者である張小虹氏は清末民国初期の服飾に関する

論考で、シャープな切り口で中国研究と文化研究に新しい問題を提起している。菅原慶乃氏とマイケル・ペリー氏の論文は、現在の中国の映画における「日本人像」を分析したもので、日中関係がかくも複雑な状況に陥っている中、その遠因を知る上でも手助けとなる。西村正男氏と藤森猛氏の論文も、現代中国の文化現象や文化産業に関する力作である。

今回の特集が、日本の中国文学研究と中国研究に対して、ささやかな一石を投じるものとなれば幸いである。

（黄英哲）